

一葉の墓

泉鏡花

明治三三（一九〇〇）年十月

門前に焼團子賣る茶店も淋う、川の水も靜に、夏は葉柳の茂れる中に、俣、時としては馬車の差置かれたるも、此處ばかりは物寂びたり。櫛線香など商ふ家なる、若き女房の姿美しきも、思なしかあはれなり。或時は藤の花盛なりき。或時は墓に淡雪かゝれり。然る折は汲み來る閻伽桶の手向の水も見る見る凍るかとぞ身に沁むなる。亡き樋口一葉が墓は築地本願寺にあり。彼處のあたりに、次手あるよりよりに、予行きて詣ることあり。

寺號多く、寺々に附屬の卵塔場少なからざれば、はじめて行きし時は、寺内なる直參堂といふにて聞きぬ。同一心にて、又異なる墓たづぬるも多しと覺しく、其の直參堂には、肩衣かけたる翁、頭も刷立のうら少き僧、白木の机に相對して帳面を控へ居り、訪ふ人には教へくる。

花屋もまた持場ありと見ゆ。直參堂附屬の墓に詣づるものの支度するは、裏門を出で、右手の方、墓地に赴く細道の角なる店なり。藤の棚庭にあり。

聲懸くれば女房立出でて、いかなるをと問ふ。桶にはさゝやかなると、稍葉の密かなると區別して並べ置く、なかんづく其の大なるをとて求むるも、あはれ、亡き人の爲には何かせむ。

線香をとにも買ひ、此處にて口火を點じたり。兩の手に提げて出づれば、素跣足の小童、遠くより認めてちよこちよこと駈け來り、前に立ちて案内しつゝ、やがて淺き井戸の水を汲み來る。さて、小さき手して、かひがひしく碑を清め、花立を洗ひ、臺石に注ぎ果つ。冬といはず春といはず、其も此も櫛の葉残らず乾びて、横に倒れ、斜になり、仰向けにしをれて見る影もあらず、月夜に葛の葉の裏見る心地す。

目立たざる碑に、先祖代々と正面に記して、横に、智相院釋妙葉信女と刻みたるが、亡き人の其の名なりとぞ。

唯視たるのみ、別にいふべき言葉もなし。さりながら青苔の下に靈なきにしもあらずと覺ゆ。餘りはかなげなれば、ふり返る彼方の墓に、美しき小提灯の灯したるが供へありて、其の薄暗かりしかなたに、蠟燭のまたゝく見えて、見好げなれば、いざ然るものあらばとて、此の邊に賣る家ありやと、傍なる小童に尋ねしに、無し、あれなるは特に下町邊の者の何處よりか持て來りて、手向けて、今しがた歸りし、と謂ひぬ。去年の秋のはじめな

りき。記すもよしなき事かな、漫歩きのすさみなるを。

「やぶちゃん注」底本は一九四二年刊岩波版「鏡花全集」巻廿八を用いた。正字正仮名で現在のワードのシステムで可能な限りの正規表現版である。但し、個人的に踊り字「く」「ぐ」は生理的に拒否感がある。試みにワードの「く」の字を二字分の大きさにして挿入しては見たが、そうすると太い「く」の字に見えてより異様になるだけなので、再現を諦めた。

なお、私は二〇〇七年九月七日の鏡花忌に、ブログにパラルビで公開したものがあり、それ以降、サイト版の全ルビ付きのHTML横書版と、同縦書版を作成しているが、その最初のブログにて、以下の附言をしてあるので、最後に引用しておく（一部表記・内容を変えた）。

*

鏡花忌である。

本文章は全集でも「雑記」の中に投げ込まれ、目立たぬ小品であるが、僕にとっては、鏡花の作品の内、一読忘れ難い佳品である。

一葉は明治二九（一八九六）年十一月に満二十四歳で亡くなっている。鏡花は一昨年下であった。

その四年後、鏡花満二六歳の年の明治三三（一九〇〇）年一月に畢生の名作「高野聖」が世に出（初出は『新小説』の同年二月号）、前年には後の終生の伴侶となる伊藤かずと出逢ってもいる。

されど、いや、故に僕は、この「一葉の墓」は、鏡花自身の稀有の「弔詞」なのだと思ふ。

……ちよいと「次手あるよりよりに、詣」でただけ——しかしそれは実にたびたびの春夏秋冬の景……「別にいふべき言葉なし」——されど、その詞の乾ぬ間に「青苔の下に靈なきにしもあらず」と語る彼……花屋の女房——墓地の小童……彼等はまさに皆、一葉の佳品の、その愛すべき登場人物その人その人……遠くともった小さな提灯、「其薄暗かりしかあなたに、蠟燭のまたゝく」そは何——一葉の魂？……いや、それは鏡花の魂である……

僕はこの作品に鏡花の一葉への限りない恋情を感じずには居られない。
いや、この作品は「レクイエム」である。

「一葉へのレクイエム」ではない。

それは——最早なし得ぬ「鏡花自身の一葉への恋情のレクイエム」である。

闇にぽつと浮かぶ墓地の遠くの小提灯の蠟燭の火……恋とはそのような儂いもの……少なくとも僕は、そう、思うのである——」